

秋の夜長に

紫式部は月明りで源氏物語をつづった、ともいわれていますが、そんな月明りを体験されたことはあるでしょうか？ なんてロマンチックなことを書いてみましたが、先日野宿をしたときそんな明るさでした。

えっ、野宿？ 穏やかじゃない響きに紫式部も興奮めでしょうか（念のため、と言いましょか…野宿とはいえ、段ボールを布団代わりにして寝たり、道端に横たわって通行人をギョッとさせているわけではありませんのでご安心を）。

私の場合はエアマットやシュラフ、安眠・安全確保のための装備を持参する確信犯です。もちろんコンクリートなどの殺風景な人工床ではなく、ふかふかの天然床、ロケーション抜群な寝床を探します。その日の寝床に野生動物の訪問はあっても、生身の人間がやってくることはありません。

壁がない場所で眠るのは心もとないですが、逆に言うと辺り一面がプライベート空間となり、木々も優しく、川の流れのリズムも心地よく、自分も自然の一部になった感覚に陥ります。

野宿最大の魅力は、何といたっても星空でしょうか。



Nature Column (ネーチャーコラム)
自然解説員などで活躍する人々をリレーしています。

夜中にふと目が覚めて、息をのむほど思いもよらぬ満天の星空が目の前に広がっている時、大地に抱かれるような恍惚（こうこつ）感で満たされてしまいます。寝るもよし、天体観測するもよし、まどろむもよし、自分ひとりだけの特等席！

夏場の天敵であった蚊もいなくなり、「山よ、お花畑よ、縦走登山よ！と有頂天で身も心も慌ただしかった時季が過ぎ、哀愁漂う森や川に包まれ、落ち葉の絨毯がふかふかな今、壁がない寝床で悦に浸るのもいいものです。山岳地帯の活動が一休みになって、手持ち無沙汰な麓で紫式部の時代をとうに遡り、原始的な遊びにいそむ秋の夜長です。

そしていよいよ長い冬の到来です。細かい結晶が集まり大きな雪片となり、呆然と降りしきる光景が大好きです。冬を歓迎しない方には申し訳ないですが、しばらくは早起きして、晩の降雪をチェックすることが日課となります。降っていないければ降っている場所へ、降っていれば迷わず大雪山へ。ここ以上の軽い雪はないのですから。

環境省東川自然保護官事務所
アクティブレンジャー

渡邊あゆみ



本で知るふるさとのお山

大雪山が舞台の小説から

大雪山を舞台にした小説は、どれほどあるのでしょうか。清水敏一さん（岩見沢在住）は「大雪山文庫書誌第四巻」で、「北海道文学百景」「北海道文学散歩」を紹介しながら20作品余を一覧にしています。

「楢山節考」で知られる深沢七郎は、「和人のユーカラ」（昭和57年、中央公論新社刊）「みちのくの人形たち」（昭和57年、大雪山で出会った、ギロツと眼が光った、大男で、彫りの深い、太い眉毛の、アイヌとは別の先住民族を登場させます。「大雪山は決して恐ろしい山ではない」という書き出しですが、厳しい山として描かれる小説も多いようです。

船山馨（札幌出身）は「夜の傾斜」（昭和55年、河出書房新社刊）の最終22章で、大雪山を襲う豪雨と烈風を凍りつくような筆致で描き、愛し合う矢代と康子が探し求めた虹藻を幻視しつつ愛別岳で凍死する結末です。

木野工（きの・たくみ）旭川出身は、1954（昭和29）年9月26日に通り魔のように襲った洞爺丸台風を下地に「樹と雪と甲虫」（昭和



「和人のユーカラ」は「みちのくの人形たち」、「山に消える」は「重い神々の下僕」に収録されています

47年、光風社書店刊）を書きました。大雪山系の原生林地帯は根こそぎ吹き倒され、未曾有の風倒木処理に命を賭けた野沢尚哉だったので、冬の現場は雪に阻まれ、3年後は風倒木にカブトムシが大発生、木は骸（むくろ）となります。

最後は、勇駒別から熊の平に入った尚哉が、甲虫が無数にたかる材木の山に片っ端からガソリンをかけ、「この野郎っ」「この野郎っ」と火をつけ、怒り狂っていきます。

三好文夫（富良野出身）の「山に消える」（昭和49年、潮出版社刊）「重い神々の下僕」からは、アイヌの青年画家、平沢ウパロが同僚の

絵描きと冬の大雪山に入り、遭難か、ウパロの故意か、同僚を失い、苦悩の果てにウパロも大雪山に消えていく物語。最後に謎めいた仕掛けがあり、ぎくりとさせられます。木野は芥川賞、直木賞の候補に6度もなり、船山は芥川賞候補、三好は直木賞候補になっ本道の代表的な作家です。